

---

# キミツグ

椎葉つかさ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キミツグ

### 【Nコード】

N7397W

### 【作者名】

椎葉つかさ

### 【あらすじ】

これはボクが視た、君が紡いだ物語。

？・春の陽気と冷たい風と - a l l e g r e t t o -

音のない世界。色のない世界。けれどそれはボクにとってはいつからか当たり前になっていた日常。

音はないけれど、この耳は確かに音が聞こえる。色は無いけれど、この瞳には確かに景色が映っている。

不確かにしか映らないこの世界は、どこか冷たく、ほんのりと優しかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ボクには不思議な力があつた。その存在を意識した時に、その存在を理解していた。不思議な感覚だった。けれど、理解した瞬間にはこの力は確かな自身の能力だと意識していた。

ボクは少し広い歩道を歩いていた。四車線の車道には車が頻繁に行き交っている。ボクは立ち止まり、その景色を眺める。車は頻繁に行き交っているけれど、ボクの耳に届く音は無く、ボクの景色に色が灯ることも無かった。

少し歩くと、道沿いに大きな公園があつた。もうすぐ陽が暮れる時間となりつつある公園は、この時間帯なのにも構わず人を受け入れていなかった。ボクは気になった。理由を訊かれたら、なんとなくとしか返せないけど。それでも確信があつた。・・・・・・・・ここには色があり、音があると。

公園に一步踏み込む。すると、肌に心地いいほどの微力な風が吹いていた。季節はまだ夏の終わりに差し掛かる頃なのに、すでに風は秋のそれだった。

公園の中を歩く。少ししてY字路にでる。そこには公園の地図が描かれた大きな看板。ボクはそれを覗き込む。どうやら、このY字路を左に行くと芝生のグラウンドがあり、右に行くと遊歩道となっているそうだ。看板から目を離す。左の道の先には青い芝生が見えた。右の道の先には細い遊歩道が、ゆらゆらと蛇行しながら続いて

いる。遊歩道の周りにはたくさんの樹木が植樹されており、道は隠れるようにして消えていた。看板を見直す。どうやら遊歩道はグラウンドの反対側に出るらしい。ボクはもう一度見比べ、右の遊歩道に足を向けた。理由を聞かれたら、なんとなく、としか返せない程度だけれど。それでも、予感がした。・・・・この先には、音が溢れていると。この先には、色が灯っていると。

「・・・・・・」

遊歩道をやや早めに歩む。・・・・ボクにとって音が聞こえるということは、色が灯るということは、とても嬉しいモノだった。それは、表すとしたらこんな言葉がお似合いだろうと自負している。だからボクは声にして、そんな自らの気持ちを素直に表現した。

「わくわく」

ボクは大きく腕を振り、その先の出逢いに想いを馳せた。

公園は規模としてはかなり大きい部類に入っているだろう。遊歩道は蛇行しているといっても、公園としてはかなりの長さだ。五分ほど歩いて、ようやく木製のベンチが見えてきた。背もたれはないが、多少休むには十分だった。ベンチに座ると、正面には矢印の形をした立て看

板が。【中間地点。休憩場】と書かれている。

「・・・・・・・・」

これで半分なのか。今来た道も、これから進む先も、木々が邪魔して先まで見通せない。最初は小さい公園だろうと思ったけれど、横長の公園だったらしい。

「・・・・・・・・」

ふと、音がした。私がそちらを見ると、そこは草むら。ガサゴソ、ガサゴソと音がする。

「・・・・・・・・犬？」

草むらはガサゴソと揺れているが、私の瞳にはそれらは白黒でしか映らない。ガサゴソと揺らしている物体が私の瞳に色を灯す。それはまさしく犬だった。それがズサッ、と体を滑らせて草むらから飛び出してきた。・・・・・・・・ちようど、私の目の前に。

「きゅふっ」

甲高い声をして、くてつと寝そべっている小型犬。もしかすると単にまだ子犬なのかもしれない。鳴き声がそんな感じだったから。

「きゅ」

ボクは音と色を運んでくれたこの子を抱き上げて、両膝の上にのせた。

「くうっ？」

子犬は愛らしい鳴き方をして、ボクの顔を見る。どうやら滑ったショックから立ち直ったみたいだ。数秒、子犬と目が合う。すると興味がなくなったのか、ぷいっと視線を外し膝の上で丸くなってしまった。丸くなり、規則正しい呼吸音を漏らしている。眠ってしまったのだらうか？ とても人に慣れているような仕草ばかりだったし、飼い犬なのかもしれない。

首もとをみると、そこには黄色の首輪がされていた。

「・・・・・・・・」

ボクは気になった。この、音と色を運んでくれた子のことが。ボクは気になった。この子に音と色を与えてくれたであろう飼い主のことが。

だからボクは、力を使うことにした。その力には代償がある。代償というのはおかしい気がするから言い換えると、付属効果といえるかもしれない。それが、ボクが日頃体験しているこの光景だ。音がなく、色がない世界。この耳と瞳を通して伝わる世界は、どうやら色と音を運ぶために必要なモノがあるらしい。つまりそれを持っているモノは音を運び、色を灯す。が、それを持たないモノはただ白黒の、サイレント映画と化してしまう。

ボクが持つこの力は、その必要なモノを視ることだ。この子犬の過去を、大切なそれを見つけるまでの物語を視ること。その過去の景色の中で、ボクはただの傍観者であるしかない。過去を視ているだけで、過去に飛ぶ訳ではない。だから、ボクが傍観というカタチの干渉をしても、なんら現在に影響はないのだ。あるとしたら、それを視た自分の心境くらいだろうか。

「・・・・・・・・ばかばかしい」

ボクは小さく笑うと、首を振り考えを中断した。そして、一つ大きく息を吸うと、力を制御する。

この物語は、子犬と女の子の物語。

ボクが瞳を開いた時、そこは音と色に囲まれた世界で。不確かな世界に身を置いているボクにとって、すべてが揃った世界だった。ボクが過去を視ると、そこには色と音があり、世界の別の在り方がボクに映る。ふと下を見ると、ボクの足下にはダンボールに入った子犬が居た。丸くなって震えている。ここはどこだろうかと思いを見回すと、公園の片隅らしいことがわかった。けれどこの公園は小さくて、ボクと出逢った公園とは別の公園らしいことが分かる。

そこに制服を着た女の子が現れて、子犬が居ることを認めるとこちらに駆け寄ってきた。

「・・・・・・・・」

女の子は何を思っているのだろう。ただじつと、しゃがんで子犬を見下ろしている。

「・・・・・・・・よしっ」

女の子は一度大きく頷くと顔を上げ、すぐに子犬の元から離れていった。ボクは気になったが、子犬を通して過去を視ているので子犬の側から離れることはできない。そして子犬は、小さな声で鳴いていた。寂しいと、悲しいとこぼしながら、元の飼い主に向けてだったのかわからないけれど、どうしてもこぼしていた。・・・・・・・・・これもボクの力の一部。過去を視るときに、対象者の想いも文字として浮かびあがってくる。

けれど私は傍観者。ただ視ることしか許されない存在だった。

ここで一度過去が途切れ、また別の過去に繋がる。そこは夕暮れの公園で、子犬に餌をあげている女の子がいる場面だった。これは、

私が大切なモノを見つける過程を視ようとしている為に起きる過去の跳躍。テレビ番組の録画のように、要らないモノ、たとえばCMなどをスキップするかのような感覚だ。

場面が浮かびあがると同時に、子犬の想いが文字として浮かんでくる。

『こわい、こわい、こわい、．．．．．おいしい、けどこわい』

そんな文字が浮かんできて、ボクはクスツと笑ってしまった。

『もうないの？　ありがとう』

そんな文字が浮かんでくる頃には、綺麗に食べ終えて短い尻尾を振っていた。

女の子は軽く子犬の顎の下を撫で、微笑んでいる。子犬もまんざらではないようで、大人しく撫でられている。

「．．．．．」

そこには芽生えたばかりの情が見て取れた。それがどの種類のそれなのか、芽生えたばかりだから分かる筈もないけれど。それは何という感情なのだろう。ボクはそれをそれと言い表す言葉を知らなかった。まだ芽生えたばかりのそれは、当事者である筈の一人と一匹にも未だ分



かつてはいないだろう。

瞳を閉じる。次に瞳を開いた時、子犬が居たのは公園ではなく、どこかの商店の突き出したビニール屋根の下だった。そこで子犬は女の子に抱かれている。女の子の隣には、・・・・・・同い年だろうか？ 同じ制服を着た男の子が縁側に座っている。

「一件目だし、まだまだ勝機はあるだろ」

「だよねっ、じゃ、早速二件目のお宅訪問としようかつ」

「急ぐ必要もないだろ。ってか、今雨宿り中つての忘れたのか」

「急に振ってくる雨が悪いのさっ」

女の子と男の子は、子犬を連れて家を回っているらしい。たぶん、子犬の里親となってくれる家を探しているのだろう。

子犬はただじっと、二人を見上げている。

『たのしかった、いろんなものがみれた、ひとりじゃなかった』

そんな言葉が浮かびあがってくる。ボクはただただ子犬を眺め、それから空を見上げる。確かに雨は降っていて、二人と一匹は雨宿り中だったのだろう。

瞳を閉じる。過去から過去へ。もっとよく言えば、過去から現在に向かって、跳躍を繰り返す。次に瞳を開いた時に視えてきた光景は、また同じように商店の軒先で座っている二人と一匹だった。違いがあるとすれば、曇り空であることだけだろうか。

「見つからないねえ」

「そうだな。まあ、そろそろ見つかつてくれるとありがたいけど」

「見つかるよ、次くらいに」

「はあ。どうしてお前はそう能天気なんだよ」

「能天気って人聞きが悪いなあ。私、前に言ったじゃん」

「なにをだ？」

「あれぐれっと、だよっ」

「あれぐれつと、ねえ……」

二人は楽しげに会話をしている。どうやら何件かまわったけれど里親は見つかっていないようだ。それにしても、あれぐれつとは何なのだろうか。私には意味が分からなかった。子犬はというと、今度もまた女の子に抱かれている。けれど、

『どうして。イヤだよ。また。どうして』

浮かんできた言葉は、また捨てられるという不安と恐怖だった。

「……」

確かに、子犬にとっては捨てられるというのは正しいのだろう。いかに里親を探すといっても、子犬にとっては、二人に捨てられるのは変わらない事実だ。

瞳を閉じる。跳躍した先に視えたのは、また同じ店の軒下だった。けれど、空は雲の切れ間

から光が射していた。

「結局こうなるのかよ」

「まあ、無事解決したんだからいいじゃん」

女の子はそう言って楽しそうに笑う。そういう女の子に抱かれて  
いるのはゆらゆらと尻尾を振る子犬で。子犬の首もとには首輪。そ  
こから繋がっているリードを持っているのは男の子だった。

「これ、無事に解決するというのかよ？」

「ハルが飼ってくれるなら、私だってこの子に会いやすいし？ ど  
こにも問題ないじゃん」

ボクは一応の決着に安堵感を覚えつつ子犬を見る。

『やった。いっしょ。たのしい。よかった』

言葉に不安や恐怖はなかった。そこにあるのは純粋な喜びだけ。そ  
れがボクをも嬉しくさせた。

不安から喜びに変わる中間点はどんな場面だったのかは分からな  
い。けれどこんな結果になったのだから、それはとても良いモノだ  
ったのだろっ。

瞳を閉じ、それと同時に力を解除する。

瞳を開いたとき、ボクは子犬を膝にのせて座っていた。・・・

・子犬の背をゆっくり撫でる。大人しく丸まったまま眠っていた。

と、道の先から女の子が歩いてきた。過去に映っていたあの子だ  
るうことはすぐに分かった。なにせ、女の子が子犬を認めると駆け  
寄ってきたのだから。ボクは子犬を抱き上げると彼女に手渡す。

「うちの子がすみません」

女の子はそう話しかけてきた。女の子も音と色を持っていた。

「あれぐれつと、とは？」

率直に疑問をぶつけてみる。女の子は一瞬きよんとするも、微  
笑みかけてくれた。

「アレグレット。やや陽気に、という意味なんです」

「ありがとう」

ボクは会話が苦手だ。だからそれだけを返すと、彼女に背を向けて歩き出した。

「……こちらこそ、ありがとうっ」

子犬のことだろう。後ろから彼女の声がしたけれど、ボクはそのまま歩き続ける。

この物語は、子犬と飼い主の絆の物語。

ボクが視た二人の大切なモノは絆だった。大切なモノのカタチは様々だけど、繰り返しの中でボクは大切なモノの本質が見抜けるのだろうか。分からない。けど、カケラに触れたような気がして、どことなく嬉しいボクが居た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7397w/>

---

キミツグ

2011年9月16日03時13分発行